出発させなさい

奨励	大塚 愼〔おおつか・しん〕
奨励者紹介	日本キリスト教団宇治教会牧師 宇治教会附属愛児園園長

主はモーセに言われた。「なぜ、わたしに向かって叫ぶのか。イスラエルの人々に命じて出発させなさい。杖を高く上げ、手を海に向かって差し伸べて、海を二つに分けなさい。そうすれば、イスラエルの民は海の中の乾いた所を通ることができる。しかし、わたしはエジプト人の心をかたくなにするから、彼らはお前たちの後を追って来る。そのとき、わたしはファラオとその全軍、戦車と騎兵を破って栄光を現す。わたしがファラオとその戦車、騎兵を破って栄光を現すとき、エジプト人は、わたしが主であることを知るようになる。」

（出エジプト記　１４章１５―１８節）

ネパール地震

私は、お茶で有名な宇治に住んでいます。宇治教会には、同志社出身の関係者が大勢いますし、初めて礼拝に出席くださった方にはおいしいきつねうどんをサービスしていますので、ぜひ一度お訪ねください。

五月病と言われたりして、世間では、この時期、連休明け頃から新しい環境に慣れることができず、うつ病に似た症状が出るという人が多い時期ですが、皆さんも新年度を迎えて、期待や不安が入り混じった、少し複雑な気持ちでいるかもしれません。考えてみれば、人生というのは、こういうスタートをいくつも切りながら、積み重ねながら作られていくものなのです。誕生、入学、進級、卒業、就職、結婚などなどです。そして、大きく見ると、歴史というのも、そういう一人ひとりの小さなスタートが集まって刻まれてきたのです。

私の牧師としての歩みのスタートには、京都の教会が送り出してくれた「ネパール・ワークキャンプ」が深く関わっています。

ネパールの無医村で、貧しい村人のための医師として長く活動された岩村昇先生が、今から３６年前、この京都の教会の講演会に来てくださり、日本の若者をアジアに出しなさいと語られたことがきっかけとなり、日本キリスト教団京都教区ネパール・ワークキャンプが開始されました。

そして、このキャンプを経験したことがきっかけとなり、19名もの仲間が牧師になりました。この春に行われたキャンプにも、神学部の学生が４名参加してくれました。

そのネパールで、４月２５日、首都カトマンズの北西80キロで、大規模な地震が発生しました。地震の規模はマグニチュード７．８です。報道によると８０００人を超える死者が確認され、今後さらに増えることが予想されています。広範囲にわたってインフラは破壊され、多くの歴史的建造物や家屋が倒壊し、道路には亀裂が入っていると伝えられ、今も余震を恐れて屋外でテントを張り、雨露をしのぐことを余儀なくされるような生活が伝えられています。

ネパールでは、今は、乾季と雨季のはざまで、山岳の農村部では、食料不足も懸念されますし、これから暑い雨季に入れば、伝染病の危険も出てきます。

日本キリスト教団京都教区アジア宣教活動委員会ネパール・プロジェクトは、第25回のワークキャンプがこの３月、無事に終わったばかりのこの時期のニュースに驚くとともに、ネパールの友人たちの生活を心配し、祈る日々が続いています。そして、若い日に、たくさんの大切なことを教えてくれたネパールの為に、何か自分たちにできることはないかと考え、今までかかわってきた方々を支援する、あるいは、その支援活動を共に支えたいと考えています。

皆さんも、もし、私たちの思いに賛同いただければ、共に祈っていただきたいと思いますし、ワークキャンプは、今年度もメンバーを募集しますので、それに参加していただければ、大変嬉しく思います。

イスラエルの旅立ち

私にとっては、ネパールに出発したことが社会人として歩み出すきっかけとなりましたが、イスラエル民族の出発は、エジプトからの脱出でした。モーセという指導者が、人々を導き出したのですが、今日はその物語を通して、さまざまな場で、いろいろな学びをされている皆さんが、これからの長い人生に、期待と不安を抱くこともあるなか、その人生をいかに歩むべきか、スタートすべきかということのヒントが与えられれば幸いです。

今から４０００年以上前、現在のイラクの辺りで遊牧をしていたユダヤ人たちは、やがて南に下ってエジプトに移り住みます。そして奴隷とされてしまうのですが、その奴隷とされていたエジプトから導き出したリーダーが、モーセです。脱出してまもなく、イスラエルの民は、彼らの行く手を阻むかのように広がる紅い海、紅海の直前でエジプトの軍隊に追い詰められてしまいます。すると、イスラエルの民は、それまで神様による多くの奇跡によって、やっとそこまで到着したにもかかわらず、「我々を連れ出したのは、エジプトに墓が無いからですか。荒れ野で死なせるためですか。一体何をするために導き出したのですか。我々はエジプトで『ほうっておいてください。自分たちはエジプト人に仕えます。荒れ野で死ぬよりエジプト人に仕える方がましです。』と言ったではありませんか」とモーセに、不満をぶつけます。そのような彼らの自分勝手な態度を見ていると、人間は苦しみということに対していかに弱い者であるかということを痛感せざるを得ません。

子どもたちを取り巻く歪（いびつ）な社会

心理学の研究によると、現代の日本の子どもたちは、対人関係の能力、感情をコントロールする力、他人の気持ちを理解する「共感性」という三つの能力が著しく低下しているそうです。そのような子どもは、何よりもまず相手に嫌な思いをさせないために、本当のことよりも、当たり障りのない、仲が良いことを壊さないということのために最善を尽くすのだそうです。そして、そういう対人関係においては、同じ考えの人間が群れ合い、違いを感じる相手とは距離を置いてしまうのです。その結果、そういう子どもたちは良きにつけ悪しきにつけ大きな刺激を受けずに育つので、何かの折に、予想外の出来事に直面したりすると、その出来事を理解して受け入れることができないパニックに陥るのです。そういうふうに育った子どもたちは、すべてが自分を中心に、自分の幸せ、自分の正しさを基準としてしまうので、相手のことを理解できないし、相手の気持ちに共感する力が育たないのだそうです。

対人関係の能力、感情をコントロールする力、他人の気持ちを理解する「共感性」の能力が顕著に低下しているという指摘は、ある意味、苦しみに耐えることで成長するという要素が退化しているという指摘でもあります。本来、人間は、苦しみのない世界だけを求めるのではなく、苦しみを受け止められる世界で育つべきなのです。それは、ただ「我慢強い」とか、「自分の感情を表に出さない」という意味で「素直な良い子」というようなことではありません。子どもが育つということには、当然ながら保護者である大人とのかかわりが問題となります。つまり、対人関係の能力、感情をコントロールする力、他人の気持ちを理解する「共感性」の能力が顕著に低下しているという子どもの問題は、そのまま、日本の大人の問題でもあるのです。たとえば、親子の関係においても、親は子どもに対して「優しい人」という評価を得るために、本当の自分を表現しません。それに応じる形で子どもも「良い子」という評価を得るために、感情を押し殺してしまうのです。そして、その歪な関係がいつの間にか日常性となってしまい、ついには歪を歪と感じなくなってしまうのです。最近、青少年による凶悪犯罪が毎日のように取りざたされていますが、そういう事件を起こしてしまった子どもたちの日常も、そのような「歪さ」が支配していたのではないかと思えてなりません。

イスラエルの民の歪さ

そして、この「歪さ」を、エジプトで奴隷とされていたイスラエルの民ももっていたのです。対人関係でのわずらわしさを避けるために、本当の感情を押し殺して、歪な関係を続ける人々と、「ほうっておいてください。自分たちはエジプト人に仕えます。荒れ野で死ぬよりエジプト人に仕える方がましです」と叫び、奴隷として、本来あるべき自分自身を押し殺して生きることを望む人々の姿とが重なるのです。

人間が成長するためには、喜びと共に、苦しみも大切であると思うのですが、この社会では、自分の思いが通らないことをそのまま単純に苦しみと表現するような時代となっていると思います。もちろん人間は、本能的に苦しみを避けたいという思いをもっています。理想を言えば、何の苦しみや挫折もなく、スーッと人生を全うしたいというのが誰しもの本音だと思います。しかし、現実にはそのような人生はあり得ないのです。いずれにせよ、私たちが忘れてならない大切なことは、苦しみには、人間という存在を壊してしまう苦しみもあるけれど、人間らしい人間として「育てる苦しみ」もあるのだということなのです。

苦しみということについて考える時に重要なのは、「何故、苦しむのか」ではなく「何のために、苦しむのか」という点です。

今、目の前にある苦しみはどうして自分に降りかかってくるのかという問いに答えを求めても、結局は答えが見つかりません。しかし、この苦しみは、自分をどのように育てるのか、という問いには、必ず答えがあるのです。

「何のために苦しむのか」。荒れ野の苦しみについて、イスラエルの人々はその答えを知らされていました。但し、その答えを心から受け入れるに到達するまでは、まさに苦難の道のりでした。荒れ野の出来事の大切なテーマの一つに「民のつぶやき」というものがあります。それは、神の業に対するつぶやきです。神のご計画と自分の歩みとのあまりにも大きなギャップがつぶやきとなるのです。しかも、そのつぶやきは不満となって、その矛先は、常に指導者に向けられます。そこに、人々の本音が表れます。困難を乗り越え、豊かで平和な状態であれば、指導者へのつぶやきも不平も出てきません。つまりそこには、人々が自分の安泰を喜んでいるのであって、神の導きや指導者との豊かな交わりの世界に、本心では生きてはいないということの表れなのです。ですから、自分の思いと違った現実が登場すると、それが神の導きの世界であると知らされても、そのことを知らせるリーダーは、不平の対象としかならないのです。イスラエルの民の頑なさは、従順な時にも、つぶやきを漏らしている時にも、何も変わらないわけです。

奇跡を契機に

そのつぶやき続ける民に、神は奇跡を示してくださいました。聖書に登場する奇跡は、人間が神を神として信じるための出来事です。人間が神を信じている、言い換えると、人間が神に頼り、従い、共に生きていることを実感することができる世界を、神はわざわざ作り出してくださるのです。もちろん神は、人間の都合に合わせるだけの方ではありません。しかし、あまりにも神から離れ、自己中心的にしか生きられない人間に対して、時には苦しみという試練を通し、そして時には奇跡を通して、人々を救いへと導いてくださるのです。

つぶやき続ける民とは対照的に、モーセは神に忠実でした。何故ならば、神の指し示す方向に真実があると確信していたからです。たとえ最低限の衣食住が保証され、極端な身の危険性がなくても、一人の人間が、自分に対して真実な生き方、本心の表現、所有を認められない奴隷という状態は、本当の自分ではないということを、モーセは痛感していたのです。彼は神に従う道にこそ、自分の本当の生き方があると確信していたのです。自分が自分であるためには、エジプト人の奴隷となる人生ではだめなのです。たとえ指し示す方向に荒れ野や砂漠が横たわっていても、そこで本当の自分を発見すること、たとえ苦しみを受けたとしても、それが自分の最終的なゴールではない、その先にある豊かな世界を目指して生きることこそが、本当の自分としての歩みなのだと決断し神に従ったのです。

イエスのまなざし

障がいをもつ人が地域で暮らすことを考える「みどりファミリー」という会を結成された、名古屋堀川伝道所の島しづ子牧師が『イエスのまなざし―福音は地の果てまで―』（燦葉出版社　２００１年）という本を書いておられます。島牧師のお嬢さんは重い障がいをもって生まれました。島牧師は、重い障がいをもっている子どもを育てることは「できないことを教えるのではなく、できることを教える」（同書）のが基本だと言っておられます。実際、そのお嬢さんにできないことは山ほどありました。歩けない、話せない、自分のことは何もできない。しかし、実は、できることも多くあるのだということに気が付いてからは、島牧師は多くの体験をお嬢さんと一緒にできるようになったそうです。たとえば、ボランティアの人が、本を読んでくれた時、その人は、こんな子に本を読んであげても意味があるのだろうか、という顔をしていたそうです。でも、読み続けるうちに、赤毛のアンが変なことをして、面白い場面にくると、その娘さんは笑うようになったそうです。他の本でも同じで、面白い場面になると笑うのです。この子は十分な意思表示はできないけれども、ちゃんと聴いていて、理解をしているのだということに気が付いていったのです。またある時、コンサートに連れて行ったら喜ぶだろうと思って、島牧師は、娘さんを車椅子に縛り付けるようにしてコンサートに行ったそうです。頭もグラグラしますし、体もずり落ちてしまいますから、頭の両側に枕をおいて、胸と腰をベルトで締めて、そんな格好ですから周りの人たちがジロジロ見ます。「こんな子は、来ても分かるのだろうか」。そういうまなざしでした。それでも、音楽のステキな場面にくると、体はコンニャクのようで、力が入らないはずなのに、力を入れて「ハー」と声を出して喜んだそうです。私は、この本を通して、重い障がいという苦しみを抱えながら一生懸命生きているお嬢さんと共に歩む島牧師の生き方に触れて、一人の人間としての幅広い感情をもっておられる方だな、まさに徹底したイエスのまなざしによって物事を評価する生き方をしている人であると、強く感じさせられました。大変な苦労をしておられる島牧師は、不平やつぶやきも、私たちとは比較にならないほどたくさんもっていることだと思います。しかし、そういう自分を知りつつ、その自分がイエスのまなざしを強烈に感じながら生きている、島牧師は、そういう人なのです。私たちは、どのような状況にも絶望しない、神の愛をどこまでも信じ続け、希望を失わないまなざしを人生に向け続けることができるでしょうか。

希望への出発

今日の箇所で主なる神はモーセに「出発させなさい」と命じています。後ろからはエジプトの軍隊が押し寄せ、前には紅海が広がっているのです。まさに絶望的な状況です。しかしモーセは、その先に約束された土地があり、必ず、神はそこへ我々を導いてくださるという信頼によって、「出発」という命令を民に下すのです。

私たちは、神の導きの下にある限り、必ず守られている。モーセの心に響き続けた希望が、イスラエルに、その歴史の大きな一歩を踏み出させました。私たちに代わって十字架を背負ってくださった主イエスを遣わされた愛の神を信頼し従う道こそ、自分が、本当の自分であり続ける道であるということを確認し、島牧師は、逆風が吹き荒れる人生を一歩ずつ歩み続けておられます。この同志社で、キリスト教に出会い、イエスの愛を知った皆さんにも、どんな時にも消えない希望が与えられているのだということを信じて、歩み続けていただきたいと思います。

２０１５年5月２０日　京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録